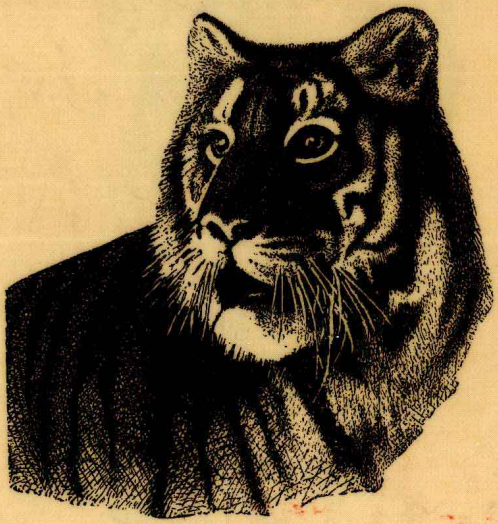
偉大なる王（ワン）

ニコライ・A・バイコフ
今村龍夫訳



中公文庫

中公文庫 ©1989

偉大なる王

一九八九年六月一〇日初版
一九八九年八月五日3版

著者 N・バイコフ
訳者 今村龍夫

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201622-3

中公文庫

偉大なる王（ワン）

ニコライ・A・バイコフ
今村龍夫訳

中央公論社

目次

第一章　プロローグ　11
第二章　王（ワン）の誕生　18
第三章　第一歩　26
第四章　人間の出現　30
第五章　引っ越し　37
第六章　はじめての獲物　44
第七章　狩り場で　51
第八章　苦い経験　60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

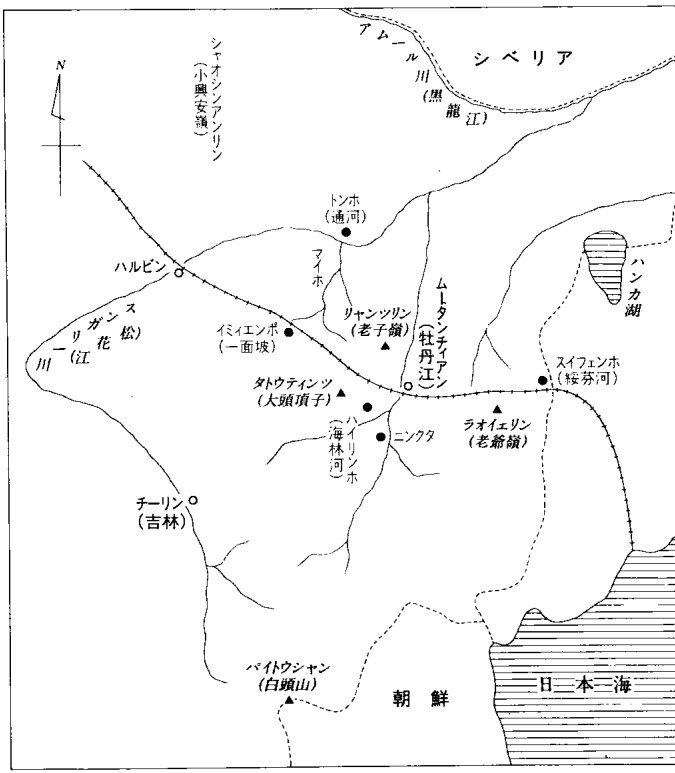
第九章　冬の訪れ　68
第一〇章　王（ワン）の父親　74
第一一章　樹海　83
第一二章　「ビロードのシューバ」　90
第一三章　トン－リとの出会い　100
第一四章　死闘　109
第一五章　勇者同士の決戦　120
第一六章　ハーレムで　136
第一七章　生まれ故郷で　143
第一八章　野獣の夜　149
第一九章　森のおしゃべりたち　157

第二〇章　はじめての悲しみ　164
第二一章　先祖の呼び声　174
第二二章　故郷へ帰る　180
第二三章　森林伐採　190
第二四章　密林はざわめく　203
第二五章　「ぼろぼろの耳」　213
第二六章　密林のおきて　226
第二七章　偉大な老人　236
第二八章　哨所にて　243
第二九章　はじめて聞く歌声　255
第三〇章　トン－リはなにを思う？　262

第三一章　虎を生け捕りする人々　269
第三二章　最後の戦い　287
第三三章　エピローグ　297
『偉大なる王』と私　303
文庫版あとがき　306

挿絵　ニコライ・A・バイコフ

偉大なる王（ワン）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

この物語の舞台となるタトウティンツの漢字表記、またこの山の略図上の位置は、長谷川濬訳『偉大なる王』（文藝春秋社刊・昭和十六年）によりました。

第一章　プロローグ

早春――。

密林（タイガー）は冬の世界からよみがえり、活気を取り戻した。黄灰色をしていた密林一帯は、若葉と新芽で緑が一段と濃くなった。渓谷や山の斜面にはミザクラとリンゴの花が咲きだした。スズランの白い小さな鈴のような花が、森の暗い茂みのあちこちで、姿を見せている。クリスタルのように澄んだ山の空気は、花の香りと大地の息づかいで満ちていた。太陽は西に傾き、丘の斜面には夕陽の長い影がのびる。花こう岩でおおわれたタトウティンツ（大頭頂子）の頂は、夕陽の明るい光で黄金色に輝き、暗青色の空で燃えているようである。

密林の昼の生命は、なにやら秘密めいた軽いおしゃべりをしながら、しだいに活動を弱め、主権を夜にゆずろうとしていた。どこか遠くの方で、名もわからない鳥がフルートの音に似た美しい声で鳴いた。

暗い松林のはしで、すばやい影が音もなくチラリとみえたかと思うと、沼地のやぶの上に一本だけそびえる紅松（べにまつ）の方へ高く飛び上がった。獲物（えもの）を求めて、岩の深い割れ目にある自分の住まいを飛びたった森の陰気な世捨て人のワシミミズクである。そのあやしげな姿は紅松の老木の頂にはっきりとみえた。大きな丸い目玉がギョロリと光り、その悲しみにみちた叫び声が夜の静けさを破った。

「お前はだれだ！　お前はだれだ！」

遠くの松林の奥から、彼の呼びかけに、

「わしだ！　わしはここだ！」

と山彦（やまびこ）のように答える声が返ってきた。叫び声は、あるときは近く、あるときは遠くなって次第に消えていった。

眠ろうとしている密林が子守り歌をかすかに口ずさむ。コウモリが森の草地の上を何匹もゆっくり飛び回る。夜がやってきた。丸い月が近くの山脈のノコギリ状の頂上から顔をのぞかせた。青みがかった黄色の光が森の茂みのなかに差し込んだ。陰影はますます濃さを増し、密林の深部は、輪郭を失いながら、夜の真っ暗やみに溶け込んでいった。

夜の生命はその力を発揮しはじめた。自然にたいする賛歌を、偉大な愛についての歌を、そして太陽のエネルギーから創造された新しい生命の歌を、自然は奏でではじめた。

夜の皇帝―ワシミミズク

数知れない音が森のあらゆるところから流れてくる。名もわからない鳥の鳴き声、牡ヤギの吹くラッパ、コオロギやセミの歌、シマリスの口笛、風の軽い一吹きによる木の葉のささやき、春の歌をうたう密林のざわめき……。

そんなとき、急に「ホーホー」と鳴いていたワシミミズクが黙りこくり、牡ヤギも叫びをやめた。サルナシの林では落ち着きのないシマリスも息を殺した。月に照らされた森の空き地に、均整のとれた猛獣が姿を現したからである。ふさふさした長い尾を持つ長身の軽やかな獣は、彫像のようにじっと動かなかった。ただ、尾の先だけがかすかに動いた。ネコのような丸い獣の顔は森の端に向けられていた。大きな丸い目は、緑がかった燐光のように輝き、暗闇を貫いていた。

小さな美しい顔と丸みのある胴からみて、新しい生命を宿している牝虎である。ワシミミズクは、そのままの姿でじっと動かなかったが、ときどきくちばしを鳴らし、まばたきをしながら月光で照らし出された猛獣の姿を凝視していた。牝虎の背と横腹の赤みがかった栗色の毛は金のように光り、口ひげや、のど、胴の下部は銀色に輝いていた。

しばらくたたずんでいた牝虎は頭を持ち上げ、ワシミミズクに目を向けた。猛獣と猛鳥の視線がぴったり合った。ワシミミズクはくちばしを鳴らし、広くて、柔らかな羽根をはばたき、森のふちにそって半円を描きながら、森の奥に姿を消した。牝虎はワシミ

ミズクを見送っていたが、視界から消えると、そのあとを追うようにしてゆっくりと草地を横切った。彼女の動き全体が、うちに秘めた力と筋肉の弾力を示していた。足の裏がビロードのように柔らかい虎は、音もたてないで、乾いた風倒木ややぶの間を通り抜けた。猛獣が通ったあとの小枝や草の茎はかすかに揺れていたが、ほとんど音も聞こえなかった。茂みや草むらでの虎の動きはヘビに大変よく似ている。音もなく軽快で、すばやい。障害物のない、たとえば、倒れ木や岩石、草、やぶなどのような、丸見えの場所では、刺激しないかぎり、虎は自分の姿を隠そうとしないで、ゆっくり行動する。

密林を通りぬけるとき、牝虎はからだの中に新しい生命の鼓動を聞いた。母性愛と種族保存の本能は、静かでひっそりした住みかを探すよう、牝虎に力強く呼び掛けた。子を安心して産め、あらゆる事故や危険から子どもを守るためである。このあたり一帯は、雨や寒さのほか、肉食の獣や鳥、それに地球上の全動物にとっていちばん恐ろしい敵——人間がねらっているからだ。もともと野獣の牝は、生まれつきの判断力、自衛本能、そして生活経験によって、出産や子の養育に必要な住みかを容易にみつける能力を備えている。

もうすぐ母となる虎は数日間、よく知っているタトウティンツの広い場所のほとんどを探し回ったが、一か所も気にいるところがなかった。いずれも、むき出していたり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto